『隠岐国産物帳』の方言語彙
『中国五県言語地図』との対照による

田籠　博

『隠岐国産物帳』に関しては既に諸本を紹介して、絵図註書が備わっている産物の配列順序の違いによってA類、B類の二系統に分かれることを明らかにした。[1] また、編集の基礎資料となった『隠岐国海士郡海士村産物扣江』の産物帳資料としての紹介と本文の翻刻も行っている。[2] それぞれの機会に、一部の記事に関連した形ではあるが、方言語彙資料としての価値についても触れたところである。本稿では、広戸惇氏の『中国五県言語地図』(昭和四十年、風間書房)に現れている旧隠岐国の方言分布との対照を通して、隠岐の産物帳資料の記事が方言語彙資料としてどのような位置にあるかについてやや詳しく検討しようとする。

本論に入る前に、『隠岐国産物帳』(以下、「隠岐産物」と略称)と『海士村産物扣江』(同「海士産物」)の記事内容の異同について簡単に記しておこう。

両資料の記事の中で、海藻類の分類意識が異なっていることは既に指摘した。[3] 海士産物が日常食用とされるものは菜類へ、そうでないものを草類へ分属させているのに対して、隠岐産物では食用に適さないものを含めて海藻類すべてを菜類へ所属させたために、菜類という分類の趣旨を逸脱しているのである。

右の分類上の違いと産物名の表記に関する相違を除けば、隠岐産物の記事内容は、産物の配列を始めとして海士産物と非常によく一致し、両資料の間には単なる編集材料と完成本と言うだけにとどまらない密接な関係がある。(海士産物の配列は絵図註書が備わる産物を分類末尾に一括することがない隠岐産物A類と同じで、これが本来の配列と思われる。)記事の出入りも少なく、隠岐産物の竹類、虫類、蛇類、百姓給物類(海藻類を除く)の記事は、海士産物の記載の中にすべて含まれる。ただ、菌類と魚類には大きな相違が認められ、隠岐産物の編集過程で大幅な増補が行われたことが分かる。穀類や木類にも増補が認められるが、その他の類では互いに数種の出入りがある程度である。

要するに、隠岐産物の記事は主要な部分を海士産物に基づきながら、菌類や魚類などに増補を行ってはいるものの、大部分は海士村

からの報告をほとんど変更することなく記載されたかのようである。[4] これが事実だとすれば、方言語彙資料として見た場合には、残念ながらその資料的価値を低めることになる。なぜなら、産物帳作成当時の隠岐においても、今日と同じように種々の地域的変異が存在したはずであるが、一村の報告に偏した編集を行った結果、隠岐方言の多様性が記事に反映されていない恐れがあるからである。異名注記が豊富とは言えないことも指摘しておかねばならない。未発見の他村の報告書に期待する外はない。

産物帳の方言語彙資料としての位置づけを測るためには、いくつかの方法が考えられる。一つの試みとして、筆者は別稿において萩藩の『周防産物名寄』所載の記事を広戸氏の『中国五県言語地図』と比較してみた。[5] その結果、『周防産物名寄』が載せる産物名の中には、言語地図における周防地域では既に失われ、隣接地域に分布を移しているものがあることを見出した。つまり、二百年以前の産物帳と現代の言語地図を比較することによって、方言語彙の分布変化を描くことが可能であるとの結論を得たのである。

しかしながら、あらかじめ断っておくが、隠岐の産物帳に限って言えば、この方法は必ずしも最善の選択ではない。本土から隔絶した隠岐にあっては、産物帳当時に存在した分布に大きな変化が生じた場合、隣接地域への移動として言語地図に残ることがないからである。もちろん場合によっては島から島への移動、または同じ島内での地域移動として痕跡が残っている可能性があるから、すべての分布変化が消えてしまうわけではないにしても、大きな期待を抱くことは難しい。さし当たり、公刊された諸種の研究書や方言辞典などとの語彙比較を行い、それらが産物帳の時代にまで遡るか否かを検討することによって資料的価値を測る方法を、別に採用する必要があろう。本稿はその準備ともなるものである。

次に『中国五県言語地図』と産物帳の記事の簡単な対照表を示す。紙幅の関係で詳しい資料の提示は行わない。表には原書の地図番号と項目名（表記は私意により改めた）を示し、次いで産物帳の記事を隠岐産物、海士産物の順に掲げた。記事が一致している場合は隠岐産物で代表させ、振り仮名や濁点の有無だけが相違する場合も一方の資料を引いた。＊印を持つのは直前の記事の異名注記である。その下に言語地図から参照すべき語形を選んで例示している。

(№)	(項目)	(産物帳記事)	(参照語形)
1	背黒鶺鴒	鶺鴒（セキレイ） 浜千鳥	セキレー、カワスズメ ハマチドリ、ハマウチドリ、ハマエチドリ
3	川蟬	翡翠（ヒスイ）、魚杓（マコ）	カワセミ、カワスズメ
4	頬白	画眉鳥（ホウシロ）、ほうじろ	ホージロ
5	四十雀	四十雀	シジューガラ
7	鷦鷯	鷦鷯（ミソサザイ）、鷯（ヤマカラ）	ミソサザイ
8	ひたき	山雀	ヤマガラ
9	燕	燕	ツバクラ、ツバクロ、ツンバクロ
10	梟	角鴟（ミミヅク）、木兎	ヨズク、ヨゾク、フクロー
12	啄木	啄木鳥（ケラツツキ）	ケラツツキ、ケラ

15	目高	ねんぶつご	ネンブツゴ
18	蜷	蜷（ニナ）	ニーナ、カワニーナ
24	蟋蟀	きりご	キリゴ、キッゴ、コーロギ
26	女郎蜘蛛	山くも	ヤマグモ
29	蝗	螽（イナゴ）	イナゴ、エナゴ、ギ(ー)ス、キリゴ
32	蝸牛	蝸牛（カタツブリ）、かたつぶり	カタツムリ、ナメクジ、デンデンムシ
33	蛞蝓	蛞蝓（ナメクシリ）、なめくじり	ナメクジ
36	蟷螂	蟷螂（カマキリ）	カマキリ
38	黄金虫	ひだん	ヒダン、フダン、フダ
39	紙魚	蠹（シミ）、しみ	シミ
40	螻蛄	螻蛄（ケラ）、けら	ケラ
42	土蜂	蠮螉（ヂガバチ）、ぢが蜂	ジガバチ、ジカ
43	熊蜂	馬蜂（クマバチ）、くま蜂	クマバチ
47	毛虫	けむし、毛虫	ケムシ
50	蟻	蟻（アリ）	アリ
51	蝶	蝶	チョー、チョーチョ
52	だに	だに	ダニ
		ほじ	ホジ、フジ
59	もぐら	土龍（ムクロ）	モクロ、モグロ
61	蜥蜴	石龍子（トカゲ）、とかげ	トカゲ、トカケ
62	井守	龍盤魚（イモリ）、いもり	イモリ
63	守宮	守宮（ヤモリ）、やもり	ヤモリ
64	青大将	烏蛇（カラスクチナワ）	カラシグチナ
67	蝮	蝮（マムシ）、まむし	マムシ、マモシ

73	木通	木通（アケビ）、あけび	アケビ、アキビ、アクビ
75	春茱萸	胡頽子（グミ）、茱萸（グミ）	グミ、グーミ、グイミ
76	秋茱萸	たなごの木、たなご	タナゴ
		＊あさとり	
77	虎杖	虎杖（イタドリ）	イタドリ
79	昼顔	いもつる草	イモズラノハナ
		＊おとり草、おこり草	
81	山百合	百合、百合草	ヤマユリ、ユリ
82	山葡萄	山ふとう、山葡萄	
		＊えびかづら	エビ、エブ
83	合歓木	合歓木（ネネノキ）、合歓木（ネブノキ）	カーカ、カーカノキ
84	かたばみ	酢醤草（カタワミ）、かたはみ草	カタバミ
		白歛草（カミクサ）、かかみ草	
		＊すいくさ、すい草	スイクサ、スイグサ
85	すいば	しんざい	シンジャイ、シンゼー、シンザイ
88	さるとり	さるかたり	カタリ、サンキレガタリ、サルガタリ
	いばら	馬かたり	ウマガタリ
		青かたり	
89	露草	花がら	ハナガラ、カメガラ
91	蓮華	だんじり	ダンジリ
92	菫	紫花地丁（スミレ）、茎（イブス）	スミレ
95	杉菜	まつぶき、松ぶき	マツブキ
		＊すぎな、杉菜	
96	土筆	土筆（ツクくシ）	ツクシ、ツクツクボーシ

99　はこべ　繁縷（ハコベ）、はこべ　ハコベラ
　＊ひづる　ヒズル、ヘズル、ヒズリ、ヘズリ
100　母子草　鼠麹草（ホウコクサ）、ほうこ草　ホーコグサ、ハーコ
101　どくだみ　いぬそば　エノゾマ、イノゾマ、エノゾメ
　＊どくだみ　ドクダメ、ドクダミ
103　空豆　夏大豆　ナツダイズ、ナツマメ
　＊そら豆

以下、順を追って各対照記事を示し、私見を交えながら解説することにする。しばしば引用する広戸惇氏の『中国五県言語地図』「解説編」は単に「解説」と略称した。解説において隠岐の各地域を指示する場合、まず島前と島後の二地域に分け、島前は島ごとに海士町、西ノ島町、知夫村に、島後は西郷町、五箇村、西郷町中村の各三地域に分ける。都万村は西郷町に含め、布施村は中村と一括した。町や村は省略する。

No.1　背黒鶺鴒（セキレイ）　セキレー、カワスズメ
　浜千鳥　ハマチドリ、ハマウチドリ、ハマエチドリ

「鶺鴒（セキレイ）」はよいとしても、別記事の「浜千鳥」を並べるのは問題になる。地図の語形ハマチドリとの関連で後者を加えたが、産物帳の配列では「鴛鴦、浜千鳥、鴫」の順であり、水鳥類が列挙されていると考えるべきで、いわゆるチドリ類に該当する可能性が高い。従って「鶺鴒」の異称としないのが適当かも知れない。島後の五箇、中村にカワスズメが見えていて、本土のカワラスズメ、カーラスズメとの関係を示しているが、産物帳に見出すことはできない。なお、2図「黄鶺鴒」は隠岐の分布が示されていないし、産物帳にも該当する記事はない。

No.3　川蟬　翡翠（ヒスイ）、魚杓（ママ）　カワセミ、カワスズメ

産物帳の間に相違がある。隠岐産物の「翡翠（ヒスイ）」はカワセミ類を意味する漢名であり、海士産物の「魚杓」は「魚狗」の誤りである。後者は普通には「かわせみ」に宛てる表記で、「ひすい」と読むとは思われない。「かわせみ」だとすれば、海士産物が報告した名称を隠岐産物が採用しなかったことになる。ところで、地図には島前の分布表示がない。その理由として「解説」は島前にこの鳥が生息しないことを指摘している。しかし、そうだとすると海士産物の記事の信頼性が問題になる。中村にあるカワスズメは、前条のように多くは「背黒鶺鴒」を表す語形である。

隠岐産物の「ひすい」は漢字表記に引かれた可能性があり、海士産物と同じく「かわせみ」と読むべきかも知れない。しかし、小野蘭山の『本草綱目啓蒙』(6)に薩摩方言のヒスイを記し、『日本方言大辞典』(7)には九州その他にこれがあることを載せているから、かつての隠岐にこの名称が行われていなかったとは断言できない。

No.4　頬白　画眉鳥（ホウシロ）、ほうじろ　ホージロ、シトト
No.5　四十雀　四十雀　シジューガラ、ホージロ

対照表には問題がない。ただし、隠岐におけるホージロという語形は、島後では「頬白」を指す地点が多いけれども、島前では「四十雀」を言う地点が多い。産物帳のような使い分けは、地図で言えば島後の状態に合致することになる。海士産物の記事から、かつて

の島前でも地図の島後と同じ使い分けがあったと言える。また、4図で隠岐全域に分布するシトトが産物帳に見えない点も気になる。シトトという名称自体の歴史は相当古いようであるが、石見西部や周防、長門にシトト系の語形が分布していないことを考えると、産物帳の時代にはまだ分布が及んでいなかったのであろうか。

No.7 鷦鷯　鷦鷯（ミソサイ）　ミソサザイ

この限りでは問題がない。地図には隠岐の特有語形として島後と海士にヤブククグリが見えているが、産物帳に記載されていない。

No.8 ひたき　山雀（ヤマカラ）　ヤマガラ

「山雀（ヤマカラ）」を対照させたのは、海士でヤマガラと言うからであるが、中国地方に類例がない上に、島後の2地点がヒーカン、ヒタキと異なっている状態では確実とは言えない。

No.9 燕　燕　ツンバクラ、ツバクロ、ツンバクロ

産物帳の読みが明らかでないから何とも言えない。地図の語形からすると「つばくら」あるいは「つばくろ」とでも読むべきか。

No.10 梟　角鴟（ミミヅク）、木兎　ヨズク、ヨゾク、フクロー

これは対照が適切かどうか疑問である。産物帳には「梟」の記事がなく、表に掲げたように「みみづく」だけが載っている。「みみづく」や「梟」を総称してヨズクと言ったとすれば、産物帳に載らない理由もうなずける。

No.12 啄木　啄木鳥（ケラツキ）、啄木　ケラツツキ、ケラ

島後にケラツツキ、ケラが分布し、1地点だけにキツツキが見える。島前では海士と西ノ島に各1地点キツツキがある。海士産物は「啄木」とあるだけで読みが不明である。隠岐産物と同じく「けらつつき」であったとすると、島前におけるキツツキ以前の語形が現れていることになる。

No.15 目高　ねんぶつご　ネンブツゴ、ネンボ、ネボ、メンボ

「ねんぶつご」には次の絵図註書がある。

川に住小魚にて、鱗細かなり。背の色薄黒く、腹の方白し。形ほらに似申候。大さは八九歩斗も御座候。(8)

描かれている図は、メダカの特徴を写しているとは言い難いが、ともかくこれに該当することは確かである。ネンブツゴは島前に見られ、島後では語形変化がはなはだしい。

No.18 蜷　蜷（ニナ）　ニーナ、カワニーナ

ニーナという語形は出雲などにも広く分布しているから、隠岐だけの現象ではない。産物帳には「海にな、川にな」の種類を載せる。ちなみに、知夫を除く地域で「螺（ニシ）」との混同が目立つ。産物帳では「螺（ニシ）　海にし、田にし」と別記されている。

No.24 蟋蟀　きりご　キリゴ、キッゴ、コーロギ

産物帳と地図の間では右の通りであるが、例のキリギリスとの関係を加えると簡単ではない。隠岐産物では別に「松虫、金鐘児（スズムシ）、玉虫」の後に「蟋蟀（キリギリス）」が載っていて、「莎鶏（ハタオリ）、轡むし」が続いている。海士産物も同じ配列であるが、「蛬（キリギリス）」と表記されている。周知のようにコオロギとキリギリスの関係は複雑で、広戸氏が『方言語彙の研究』（昭六十一年、風間書房）において語史と分布を重ねて詳細に論じておられる。ただ、産物帳の「きりご」には若干問題がある。配列を見ると、隠岐産物で「蠹（シミ）、きりご、はさみ虫、きりむし、あつき虫」などの野菜類の害虫を列挙した中に現れているからである。

『島根県方言辞典』[9]によると、石見の那賀郡ではイナゴやキリギリス、バッタを指すキリゴがあり、隠岐郡西郷町加茂ではコオロギやバッタ類の総称であるという。29図「蝗」を西郷町でキリゴ、イナキリゴとする地点がある（同地点で「蟋蟀」はソバキリゴ）ことは辞典の記事を補うから、「きりご」の指示する虫については今一度考える必要がありそうである。

No.26 女郎蜘蛛　山くも　　ヤマグモ

「山くも」とヤマグモの対照は確実とは言えない。隠岐産物が載せる蜘蛛の種類には「山くも、土くも、あしなかくも、銭くも、はいとりくも、青くも」があり、地図で島後にヤマグモが多く分布しているから、「山くも」が該当すると考えた。他の種類とも考え合わせる必要があろう。島後あるいは島前にも分布しているオニグモ、トラグモは記事に見えない。海士にカネグモがあるが、「銭ぐも」の意だとすれば別種と思われる。

No.29 蝗　　螽（イナゴ）　　イナゴ、エナゴ、ギ(ー)ス、キリゴ

前々条で述べたように、イナゴとバッタ、コオロギの間には名称に混乱があるようである。島前、島後ともイナゴ、エナゴであるから、対照表としてはこれでよいであろう。

No.32 蝸牛　　蝸牛（カタツフリ）、かたつぶり　　カタツムリ

No.33 蛞蝓　　蛞蝓（ナメクシリ）、なめくじり　　ナメクジ

32図と33図は問題が関連する。32図の「かたつぶり」が地図のカタツムリと対応するものであることは疑いない。しかし、知夫を除く各地にはナメクジという語形が分布していて、柳田国男の『蝸牛考』以来、カタツム（ブ）リよりナメクジが古い語形というのが定説である。また、33図でも海士の2地点を除く全部がナメクジであるように「蝸牛」と「蛞蝓」を区別しない隠岐の状態が古い呼称方式の名残りとされている。にもかかわらず、産物帳にその記事がないのはなぜか。

この疑問に答えるのは現段階ではむずかしい。ただ、産物帳の記事を信頼する立場から、通説に対して次のような問題提起を行うことは許されるだろう。すなわち、出雲などに広く「蛞蝓」を意味するナメクジリ類の語形が分布しているが、隠岐では例外なくナメクジである。ところが、かえって「蝸牛」を意味するナメクジラという語形が西郷に見えているのである。ナメクジ（ナメクヂ）の歴史の古さは事実だとしても、民衆語源に基づくと言われるナメクジリの歴史は案外に新しく、室町時代あたりかと思われる。[10]『日本言語地図解説』[11]5に指摘があるように、ジとヂを発音の上で区別する地域のナメクジもヂではないというから、隠岐においても

ナメクヂ→ナメクジリ→（ナメクジラ→）ナメクジ

の語形変化があったと考えるべきであり、産物帳の記事がまさに例証するところである。従来はとかく「蝸牛」と「蛞蝓」を区別しない事実ばかりが重視されて、隠岐のナメクジという語形の新しさが見逃されてきたのではないか。

32図では知夫を除く各地にデンデンムシとカタツムリが分布するが、「解説」によると西ノ島の1地点を除き、前者より後者が新しいと意識されているという。しかしながら、海士産物の仮名書き例のようにかつてカタツブリが行われていたことが確かだとすれば、「蝸牛」には独自に一連の語形の交替があったわけで、これに隠岐独自

のヤマサザエ類を加えると、この中で「蛞蝓」と区別がないナメクジ（リ）が確固とした使用領域を保っていたと考えるのは、かなり困難なことである。

憶測に類するが、「蝸牛」と「蛞蝓」が本来は別種で異なった動物であることは承知しながら、共にぬめりを残すやっかいな虫（害虫）としての共通性しか意識しない日常生活では、二種を同じくナメクジ（リ）と呼んで扱うことがないとは言えない。産物帳の担当者は分類的な立場から二種を区別して記録した。「蝸牛」のためにヤマサザエを造語したり、「蛞蝓」のためにハダカナメクジ（海士）を工夫したのは、一般の人々にも時にそうした意識が働くことの現れである。しかし、ナメクジ（リ）といういかにもその生態に相応しい語形によって、類似する「蝸牛」をも表すことがあったとしても、それは「蝸牛」の呼称の変化過程とは関係が簿い、いわば人々の生活意識に関わる事柄である。そうした素朴な意識の言語化としての「蝸牛」を表すナメクジ（リ）であればこそ、他の語形と並存することができたのではなかろうか。

No.36 蟷螂　蟷螂（カマキリ）　カマキリ

産物帳にはカマキリより古い語形とされる島前のボージリ、島後のボンジリが載っていない。石田春昭氏の『島根県に於ける方言の分布』[12]がこれらの語形を記録していないことについて、『方言語彙の研究』は「調査の方法によるものか、隠岐の人々が、新しく侵入し、かつは教科書で習ったカマキリを教えたとしか思われない。」（三〇七頁）と評している。しかし、隠岐全域に分布するカマキリは産物帳に既に載っているのであるから、教科書の影響を考えねばならないほど新しい語形ではない。（石田氏のために付記すれば、その後『隠岐島方言の研究』[13]の「隠岐島方言分布調査」でボンジリ系の語形分布について報告がある。）

No.38 黄金虫　ひだん　ヒダン、フダン、フダ

島前にヒダン、フダンが、島後にフダが分布する。このヒダン類（「解説」は「火断」の意という）は隠岐の特有語形であるが、産物帳にまで遡ることを確認することができる。次の絵図註書がある。

夏生じ、色形とも玉虫に似て、大く丸く御座候。[14]

No.39 紙魚　蠹（シミ）、しみ　シミ

この対照が適切かどうかには不安がある。「蠹（シミ）」はキクイムシの類で別種かも知れない。

No.40 螻蛄　螻蛄（ケラ）、けら　ケラ

ケラは海士を除く全域に見えるが、アゼモ（ム）クロやアデモ（ム）クロなど他の語形も多い。これらは59図と関係づけて考える必要がある。

No.42 土蜂　蟷蜻（ヂガハチ）　ぢが蜂　ジガバチ、ジカ

この地図に関しては、別稿で指摘したようにツチバチとジガバチが区別されていないという問題がある。海士と島後にジガバチ、ジカが分布するが、西ノ島と知夫にはツチバチが分布していることを考えると、隠岐についても同様の混乱があるようである。海士産物の「ぢが蜂」からツチバチへ転じたとは考えにくいからである。なお、知夫にコシビソという語形が中国地方では唯一示されている。周防と長門の『産物名寄』がジガバチの異名として載せる「コシボソ」と関係があるとすれば貴重な例となる。

No.43 熊蜂　馬蜂（クマハチ）、くま蜂　クマバチ

クマバチは島後の語形である。イッスンバチが西ノ島と知夫にある。知夫ではアカバチとも言うらしい。海士と知夫のミツバチは、丸い形のをいうと「解説」にあるが、別種ではなかろうか。

No.47 毛虫　けむし、毛虫　ケムシ

全域にケムシが分布する。西ノ島と西郷に見えるオコジは、特別の種類を指す場合に用いられた語形のようである。

No.50 蟻　蟻（アリ）　アリ

全域アリで問題はない。島後にはアリゴという本土と同じ語形も分布するが、島前はすべてアリである。

No.51 蝶　蝶　チョー、チョーチョ

産物帳の読みが不明であるが、チョウとして問題はない。産物帳のチョーと地図のチョーチョの関係については、別稿で少し述べたことがある。

No.52 だに　だに　ダニ
　　ほじ　ホジ、ホジー

地図ではダニは隠岐全域に分布し、ホジ、ホジーは島前に限られる。「解説」が島根県では概してフジ、ホジは山のをいうと説明しているように本来は別種である。産物帳が一方を異名とせずに、「だに、ほじ」と並記しているのはその認識の現れである。ところで、「ほじ」には次の絵図註書がある。

夏牛馬に付、色薄黒く、形大豆程有之。少し平く御座候。(15)

これによると、ダニ類の中でも家畜に寄生して吸血する種類らしく、必ずしも山野に生息する虫とは限らないようである。

No.59 もぐら　土龍（ムクロ）　モクロ、モグロ

隠岐全域でモクロであり、モグロは西郷に1地点あるだけであるから新しい語形と考えられる。産物帳の記事も清音形で読むべきであろう。ところで、前述のように40図ではモクロやムクロを後部要素とする語形があったが、そのモクロ（ムクロ）は産物帳の記事に見るように、かつて存在した「もぐら」のモクロ（ムクロ）という語形が複合語の中で保たれたものである。

No.61 蜥蜴　石龍子（トカゲ）、とかげ　トカゲ、トカケ

これに問題はなさそうであるがそうではない。地図で中国地方の分布を見ると、出雲と鳥取県西部を除く地域で優勢な語形はトカケであり、トカゲは隠岐を含めて狭い領域にしか分布していないからである。隠岐では西郷と五箇および海士に各1地点ずつトカケが見えているけれども、他はトカゲで占められていると言ってよい。『日本言語地図解説』5は二つの語形の新古関係について次のように述べている。

全体的にトカケの勢力が強いが、トカゲが長野・静岡、能登北端、紀伊半島南端、出雲・隠岐、四国南半、九州西半にみられ、トカケは新しいものとみられる。（八〇頁）

転写を重ねた隠岐産物はともかく、海士産物が濁音形であることは信頼に値するから、新語形トカケは産物帳当時の隠岐にはまだ及んでいなかったらしい。

No.62 井守　龍盤魚（くもり）、いもり　イモリ

No.63 守宮　守宮（ヤモリ）、やもり　ヤモリ

右については問題がない。

No.64 青大将　烏蛇（カラスクチナワ）　カラシグチナ

これは対照に選んだ産物帳の記事が適切かどうか問題である。地図の分布は、島前と西郷にアオダイショー、クチナがあり、島後にコモンクチナ、コモンその他の語形が見える。対照させたカラシグチナは西郷に1地点しかないから、隠岐の代表語形と言うわけではない。参考のため隠岐産物の蛇類の記事を引くと、「蝮（マムシ）、烏蛇（カラスクチナワ）、さかを、ひはかり、くろ蛇」の順に記載されており、最後の「くろ蛇」に次の絵図註書がある。

形烏蛇に似て、背の色黒く、腹白く、大さ六七尺斗も御座候。[16]

野津大氏の『隠岐の生物』[17]によると、隠岐に生息している蛇類はマムシ、アオダイショウ、ヤマカガシ、ヒバカリ、シマヘビ、ジムグリ、シロマダラなどである。記事と較べると、「蝮」はマムシ、「ひはかり」はヒバカリでよかろう。「さかを」は『島根県に於ける方言の分布』の出雲方言集では「青大将」とあるが、シマヘビとするのが穏当である。では残る「烏蛇」と「くろ蛇」がどの種に該当するのか。註書の記事は体長を過大に記していると見なして、「烏蛇」にヤマカガシ、「くろ蛇」にジムグリを当てれば、アオダイショウに該当する記事を産物帳が欠くことになる。『日本方言大辞典』は鳥取県西伯郡でカラスグチナワがアオダイショウの意で用いられていることを載せている。地図にカラシグチナが見えることを根拠として、ここには「烏蛇」を対照表に掲げておく。しかし、地図にもクチナやヘビという語形が見えるから、総称と同じ「蛇（クチナワ）」であった可能性も捨てきれない。出雲の産物帳の記事を見ると、[18]「蝮、サカヲ、ナブサ、烏蛇、ヒハカリ、山シバ」とある。「サカヲ」がシマヘビに、「烏蛇」がヤマカガシに、「山シバ」がジムグリに当たり、地図が示す通り「ナブサ」がアオダイショウに該当する。

No.67 蝮　蝮（マムシ）、まむし　マムシ、マモシ

問題がないことは右の通りである。

No.73 木通　木通（アケビ）、あけび　アケビ、アキビ、アクビ

島前がアクビ、島後の大部分がアキビで、西郷に1地点アケビがある。産物帳以後に語形変化を起こしたのであろうか。

No.75 春茱萸　胡頽子（グミ）、萸（グミ）　グミ、グーミ、グイミ

島後の大部分と海士にグミが見えるほか、グイミやグーミがわずかにあり、海士と西ノ島にはタワラグイメが各1地点ずつある。グイミ類は島根県の最西部や山口県にも分布するが、隠岐の近隣には見えていない。海路からの伝播を考えるべきか。

No.76 秋茱萸　たなごの木、たなご　タナゴ

＊あさとり

隠岐全域がタナゴの一語形である。「たなごの木」には次の絵図註書がある。

木の色赤黒く、ゑたに針あり。春芽を出し、葉の形くみの葉のことくにて、夏花咲、形色ともくみの花の如し。夏の中に小豆程の実成、秋末に至り赤く熟し申候。冬葉落申候。小木にて御座候。[19]

異名の「あさとり」と関係ある語形は隠岐に見えない。アサドリは岡山県や鳥取県から出雲東部に分布し、出雲から石見にかけてはアサイドリ類が連続しているから、かつては隠岐にも存在していたものか。隠岐だけから考えると、アサドリを新語形タナゴが駆逐し

た形であるが、中国地方では近畿に近い地域にアサドリが分布するのであるから、タナゴの出自を明らかにしなければ解釈は難しい。そのタナゴやタナンゴという語形は、島根半島の鹿島町や平田市および境港市に各1地点ずつ見えているが（『島根県に於ける方言の分布』では八束町でも）、これが本土から隠岐へ渡った過去の名残りなのか、あるいは隠岐の語形が進出する先駆けなのか、これだけでは分からない。

No.77 虎杖　虎杖（イタトリ）　イタドリ

これには問題がない。

No.79 昼顔　いもつる草　イモズラノハナ

＊おとり草、おこり草

「いもつる草」は、次の絵図註書によって（ハマ）ヒルガオであることが分かる。

春野に生し、茎色薄青く、葉の形やまの芋の葉に似て、夏花咲、秋実付申候。花の形あさかほに似て、色薄赤く、実も朝かほに同し。かつら草にて御座候。[20]

地図では島後全域と海士の1地点にヤマアサガオが分布し、海士と西ノ島にイモズラノハナが3地点ある。これが「いもつる草」の変化した語形と考えられる。

異名注記は隠岐産物の諸本に「おとり草」とあるが、海士産物では「おこり草」であり、どちらが本来の語形であるか分からない。地図で島根半島の平田市に1地点オコリバナが存在すること、また、『日本方言大辞典』が引いているように『長門産物名寄』に「皷子花（ヒルカホ）」の異名として「ヲコリハナ」を注記していることから、海士産物の「おこり草」が正しいと判断する。同辞典によると新潟、佐賀、鹿児島の各地に用いられた名称であるらしい。海路による伝播かどうかはともかく、隠岐島内では失われた語形を産物帳がとどめているわけである。

No.81 山百合　百合、百合草　ヤマユリ

概して島後ではヤマユリと言い、島前にはヤガン、ヤエガン、ヤエガミ、ヤリガミ、ヤマガミという類似語形が分布して対立している。産物帳の「百合、百合草」の読みが明らかであれば過去の状況を知ることができるのであるが、この表記では何とも言えない。

No.82 山葡萄　山ふとう、山葡萄

＊えびかづら　エビ、エブ

これでは異名の「えびかづら」が隠岐全域のエビ類と一致する。出雲などに分布するヤマブドーは隠岐には見えない。島後に見える隠岐特有語形のボンザ、ボンダは産物帳には載っていない。

No.83 合歓木　合歓木（ムネノキ）、合歓木（ネブノキ）　カーカ、カーカノキ

問題点が二つある。まず、隠岐産物の振り仮名「むねのき」が海士産物の「ねぶのき」と相違している。始め「むねのき」は「ねむのき」の誤写だと考えたが、隠岐産物の諸本は一致してこの振り仮名を付しているから、原本から語音顚倒によるこの読みがあったとしか思われない。そうであれば海士産物の「ねぶのき」との関係はどう考えるべきなのか。より信頼できる本文の出現を待たねばならない。

次に、隠岐全域はカーカ、カーカノキという語形で例外がない。漢語「合歓」の字音に基づくと言われるこの語形を、産物帳が載せ

ていないのも問題である。中国地方の分布を見ると、字音系のカーカ（ノキ）、コーカ（ノキ）が主流を占めているものの、ネブ（ム）ノキに類する語形も各地に見えているから、かつては隠岐でも行われていたのであろう。隠岐でカーカ、カーカノキが専用されるようになったのは、産物帳以後のことと考えたい。

No.84 かたばみ　酢醤草（カタクワミ）、かたはみ草　カタバミ
白歛草（カ、ミクサ）、かかみ草
＊すいくさ、すい草　スイクサ、スイグサ

産物帳からは二つの記事を引いている。「かたばみ」をカガミグサというのは中国地方に一般のことで、スイグサ、スイバも広い範囲で行われている。隠岐の語形はスイクサ、スイスイが主で、西郷にはカタバミも見えている。別の産物のように載せるのはどういう理由なのか不明である。後の91図に引く「だんじり」の註書にも「葉の形かゝみ草に似て」とあるが、地図では隠岐に存在しないカガミグサが産物帳に見出せるのは重要である。

No.85 すいば　しんざい　シンジャイ、シンゼー、シンザイ

「しんざい」には絵図註書がある。

野に生し、四季共に葉有。茎色青く、夏は赤き花咲。形蕎麦粒に似て、秋茄子種のやう成実付申候。[21]

「すいば」であることは確かであるが、絵図の方は実物とはやや異なっている。島前にはスイスイ、スイッポという語形があり、食味の関係から前の84図と同様の語形を持つ。どう使い分けられているのかは分からない。

No.88 さるとり　さるかたり　カタリ、サンキレガタリ、サルガタリ
いばら　馬かたり　ウマガタリ
青かたり

産物帳の記事には本文の乱れがある上に、どれがサルトリイバラに該当するのかよく分からない。海士産物は掲げた通りであるが、隠岐産物は写本によって「さるかたら」「さるかつら」とあったり、「さねかつら」となっている写本もある。直前に蔓性植物が列挙されているので誤認したのであろう。「馬かたり」「青かたり」もそれぞれ「馬かたら」「青かたら」という本文がある。しかし、地図によれば隠岐にカタラという語形は分布しないから、海士産物の記事に従っておきたい。

なお、「解説」では「菝葜（サルトリイバラ）」と「土茯苓（サンキライ）」の二種があると記しているが、貝原益軒が『大和本草』巻六で注意しているように、後者は舶来の薬草で日本には産出しない。ただ名称だけが誤って前者に用いられたのである。そのサンキライは西ノ島に1地点見え、サンキレガタリとサンキリガタリも海士や西郷にあるが今は関係がない。

産物帳の記事との引き当てが難しい事情は、西郷にサルガタリが1地点あり、これが海士産物の「さるかたり」に該当しそうであるが、西ノ島と知夫にはウマガタリがあって産物帳の「馬かたり」に一致する。（出雲に分布するマガタラも「馬がたら」に基づく語形か。）さらに、出雲における産物帳編集の資料である『島根郡東組産物絵図差出帳』[22]に次の記事が載っていて、結論がいっそう躊躇される。すなわち、「犬かたら」一名「犬さんしょう」の後にやはり山椒に似た植物の「猿かたら」を載せ、絵図からサルトリイバラと確認でき

る「青かたら」が続いている。これによると、隠岐の「青かたり」を候補から外すこともできそうにない。

№89 露草　花がら　ハナガラ、カメガラ

この地図には島前のカメガラと島後のハナガラという対立が明瞭に現れている。島後にはトンバグサ、トンボグサもある（出雲南部ではトンボグサは「かたばみ」の意）。

カメガラは中国地方では山口県の長門東部と隣接する島根県の石見西部にまとまって分布し、出雲東部と鳥取県西部の西伯郡と日野郡にも連続した分布がある。そしてハナガラは山口県全域と広島県の西部に広い分布領域を持っている。しかし、別稿で明らかにしたように、かつて産物帳作成の時代には、山口県の周防地域にもカメガラが存在していたことが『周防産物名寄』などの産物帳資料によって知られるから、隠岐におけるカメガラとハナガラの分布状況が産物帳の時代には今日と異なっていたとしても不思議ではない。と言うのは、海士産物が「かめがら」ではなくて隠岐産物と同じく「花がら」を載せている事実を解するのに、周防の分布変化が参考になると考えるからである。島前のカメガラは産物帳以後に、恐らくは海路を経て伝わった語形ではないだろうか。

№91 蓮華　だんじり　ダンジリ

この対照には大きな問題がある。地図の分布状況は主として島後にダンジリが、島前および島後にも3地点にミヤコ、ミヤコバナが見えている。このダンジリという語形は、中国地方はもとより恐らく全国的に見ても隠岐に特有なものと認められるのに対して、ミヤコ、ミヤコバナは出雲や伯耆に広く分布する点で対照的である。ところが、産物帳の「だんじり」には次の絵図註書がある。

春野に生し、茎青く、葉の形かゝみ草に似て、春の中に黄色成花咲。形蕪菜の花に似て、夏の中に実付、形栗の莢の様成ちいさき丸き物の内、薄黒き細か成実御座候。[23]

問題になるのは、この絵図註書である。葉の形がカタバミに似ること、花色が黄色であること、そして絵図に描かれた葉が三葉（二枚の托葉は描かれていない）であることを総合すると、今日言うところのレンゲ（ゲンゲ）ではあり得ず、和名ミヤコグサがこれに該当すると思われることである。（ただ実の形が栗の「いが」に似るというのは、レンゲの特徴のようにも思える。）『本草綱目啓蒙』の「百脉根」の条に、

ミヤコグサ　ミヤコバナ　コガネグサ加州　コガネバナ
コガネメヌキ　キレンゲ　ヱボシグサ江戸　キツネノヱンドウ江州

原野ニ極メテ多シ。一根叢生、茎長サ七八寸、皆地ニ就テ生シ、荷花紫草（レンゲバナ）ノ状ノ如シ。五葉ゴトニ一処ニ生シ、迎春（ワウバイ）花ノ葉ノ形ノ如ニシテ薄小ナリ。色ハ深緑、三四月茎端ニ七八花攢簇ス。形モ荷花紫草花ノ如クニシテ大ナリ。金黄色又褐色ヲ雑ユル者アリ。花後細莢ヲ結ブ。長サ寸許、生ハ青ク、熟ハ褐色ナリ。（巻八）

とあり、「だんじり」の特徴と一致するようである。そうであれば、産物帳が記録した「だんじり」から現在までの間に、その指す植物がミヤコグサからレンゲ（ゲンゲ）へ変化したことになる。あるいは実の形がレンゲの特徴と似る点を重視して、産物帳編集の際には

既に意味の移行が生じ始めていたとしてもよい。隠岐におけるダンジリとミヤコ、ミヤコバナの関係を考える場合、水田緑肥としてのレンゲの普及をも勘案する必要がある。

絵図註書を備える産物帳資料は、時として正確な内容把握を可能にすることを強調しておきたい。

No.92 菫　紫花地丁（スミレ）、茎（イブス）　スミレ

海士産物の記事「茎（イブス）」は理解できない。前後の産物配列は隠岐産物A類と完全に一致しているから、ここに引くべき記事としても、確実な読みが分からない。地図では全域にスミレが分布し、島後にはスモートリグサという広く中国地方に分布する語形も見えるが、産物帳には載っていない。

No.95 杉菜　まつぶき、松ぶき　マツブキ

＊すぎな、杉菜

No.96 土筆　土筆（ツクシ）　ツクシ、ツクツクボーシ

マツブキは隠岐特有の語形と言えるが、産物帳にも記載されていることから古く遡るものであることが分かる。「解説」が紹介しているように、『本草綱目啓蒙』は播磨にこの名があったことを記している。『日本言語地図』243図によると、兵庫県と岡山県の北西部に各1地点マツブキが示されている。また、近畿、四国、九州にマツを構成要素とする語形が分布しているから、それらと関係があるのかも知れない。『日本言語地図解説』5が隠岐のマツブキに関して「隠岐にあるマツブキの伝播経路については別に考究すべきである」（一二九頁）と述べる本旨は不明であるが、二百年以前から用いられていた事実を指摘することは考究の参考資料になるだろう。なお、『日本言語地図』では島後にスギナを示している。これが必ずしも最近獲得した語形でないことも産物帳の記事から明らかである。関連する96図については、もう少し広く資料を集める必要がある。

No.99 はこべ　繁縷（ハコベ）、はこべ　ハコベラ

＊ひづる　ヒズル、ヘズル、ヒズリ、ヘズリ

隠岐全域にヒズル類の語形が分布し、西郷に1地点だけハコベラがある。このハコベラの存在から「解説」は、「かつては、この地方もハコベラであったと考えることもできそうである。」と言うが、産物帳の「はこべ」との関係はどうなるだろうか。異名の「ひづる」から言うと、ヒズリ、ヘズリは島外の影響を受けた語形かも知れない。

No.100 母子草　鼠麹草（ホウコクサ）、ほうこ草　ホーコグサ、ハーコ

対照させた限りでは問題がない。しかし、ホーコグサは西郷の1地点だけであり、ハーコも知夫に1地点しかない。隠岐全体から言えばヒナサンヨモギの方が優勢で、トノサンヨモギも西郷に見えている。後者は山口県や広島県西部、石見西部にまとまって分布しているトノサマヨモギ、および『周防産物名寄』に「鼠麹草（ホウコクサ）」の異名として載っている「トノサマグサ」と関係がありそうである。ヒナサンヨモギはこれにならって隠岐で独自に発生した語形ではないだろうか。

No.101 どくだみ　いぬそば　エノゾマ、イノゾマ、エノゾメ

＊どくたみ　ドクダメ、ドクダミ

産物帳の見出しに挙がっているのは「いぬそば」で、「どくたみ」は異名として扱われている。地図で隠岐に広く分布するのはドクダ

メであり、特に島前は1地点がドクダミの他はこの語形で占められている。つまり、海士産物が載せている「いぬそば」は島前では消えてしまっている。「解説」はエノゾマを語義不明としているが、「犬」をイノ、エノと発音するのは隠岐では普通のことで、それに連濁規則が働いてイヌソバからイヌゾマへ変化したものである。島後にはカッテグサという語形も4地点にあるが産物帳には見えない。

No.103 空豆　夏大豆　ナツダイズ、ナツマメ
＊そら豆

隠岐全域でナツマメと言う中にあって、島後の五箇と中村にだけ分布するナツダイズが産物帳で見出しに掲げられているのが注目される。これは隠岐内部で分布変化があったことを如実に示す例である。海士を始めとする島前から消え、島後でも島外との交通が盛んな西郷などから駆逐されて、辛うじて北部に残った状態かと想像される。岡山県南部にダイズがあるから、かつては広く行われていたことを思わせるし、同じ地域にはソラダイズという混交語形もある。

産物帳が異名として載せる「そら豆」（ソラズ？）は隠岐には広まらなかったらしい。

最後に、産物帳に記載がありそうでいながら、対照表から漏れている事項についてまとめておく。

次の各項目は産物帳に相当する記事がなかったため、対照表を作ることができなかったものである。

6図「えなが」　22図「蟻地獄」　30図「赤蜻蛉」
31図「やんま」　41図「穀象虫」　44・45図「大小の蚋」
46図「尾長蛆」　53図「水澄まし」　54図「あめんぼ」
55図「田亀」　56図「蝦蟇」　57図「殿様蛙」
58図「おたまじゃくし」　74図「馬酔木」　80図「曼珠沙華」
86図「龍の鬚」　97図「春蘭」　98図「とくさ」
106図「馬鈴薯」　110「南瓜」

右の各項目はいろいろな事情を含んでいる。一つには、産物帳の調査が粗雑であったために記事が存在しないのかも知れない。6図、22図、41図、44～46図、55図、58図、86図、97図、98図にはその可能性がある。30図と31図の対照表が作れない原因にも産物帳の側の不備がある。隠岐産物に「蜻蜓（トンボウ）」、海士産物に「蜻蛉（トンバウ）」があるものの、種類名までは載っていないからである。

しかし、56図と57図に関しては、野津大氏の『隠岐の生物』に「トノサマガエルやヒキガエルがいないのは不思議だと思う。」（五六頁）と記されているから、産物帳の欠陥ではない。隠岐産物は「蛙」の見出しの下に「あまかへる、しまかへる」を載せ、海士産物にはもう一種「つゝりかいる」が載っているが、いずれも「蝦蟇」や「殿様蛙」には該当しないようである。そう言えば、例えば57図の各語形を見るとアカガエルなどは「殿様蛙」の方言形とは思われないし、他にも別種の名称が混じている可能性がありそうである。野津氏の記述を信じるならば、地図に示されているヒキガエルやトノサマガエルという語形の具体性がかえって疑われることになろう。

101図の「南瓜」についてはかつて述べた。[24] 確実な裏づけこそ得られないけれども、産物帳時代には出雲まで普及していた「南瓜」であるが、隠岐ではまだ栽培されていなかったのだと積極的に理解し

たい。次に触れる104図「玉蜀黍」や106図「馬鈴薯」、「薩摩芋」など比較的新しく普及してきた産物の記事が隠岐産物にないことについても同様である。

「玉蜀黍」については、広戸氏が『方言語彙の研究』で詳しく論じておられる。筆者には今一つ確信がないために対照表には加えなかった。隠岐産物が載せる黍の品種は「大きひ、小きひ、南蛮黍」の三種に過ぎず、二十九種を集めた出雲の産物帳とは比較にならない。海士産物に「なんばんきび」と記されている最後の「南蛮黍」が「玉蜀黍」である可能性はある。しかし、地図に示されているのがトーキビ系の語形ばかりでナンバン系がなく、出雲の産物帳に「玉蜀黍」に当たるかも知れない「トウキヒ、タウ〳〵キヒ」とは別に「南蛮キヒ、白ナンバン、赤南蛮」が存在することを考慮して、隠岐産物の記事は「蜀黍」を指すものと考えた。[25]

引き当てに迷ったために加えなかったのが、53図「水澄まし」と54図「あめんぼ」である。隠岐産物は水棲昆虫を「水蛭（ヒル）、飛虫、ほうふり虫」と並べているが、海士産物の同じ箇所には「蛭（ヒル）、水掻、ぼうふり虫」とある。「飛虫」と「水掻」が同じ虫であるとしても、読みが明らかでないから「水澄まし」と「あめんぼ」の各語形と比較することができなかった。どちらかと言えば、海士と島後にトビウマ、トビンマの語形を持つ55図「あめんぼ」に該当するのではないかと筆者は推測している。

以上、産物帳の記事と『中国五県言語地図』の語形の対照に関して簡単に述べた。本格的な解釈のためにはなお参照すべき語形や資料も多いであろうが、当面は隠岐産物と海士産物の方言語彙資料としての価値を測るのが目的であるから、十分な努力を払っていない。足りない点は今後補って行かねばならない。

繰り返しになるけれども、産物帳の記事を『中国五県言語地図』と対照してみた結果、隠岐特有の語形で産物帳時代まで遡るものがあることを知ることができたほか、語の意味変化の形跡も見出せた。特にいくつかの記事からは、言語地図には見えていない語が産物帳に記載されているらしいことを知り、島前と島後の間で分布の移動があったらしい項目もある。解説の中でたびたび指摘し、右にも述べたように、産物帳の記事は完全な資料ではありえない。しかし、文献資料を欠いている過去の隠岐方言を考察するための重要な資料であることは認められるのではないだろうか。

注

（1）拙稿「『隠岐国産物帳』の諸本について」島根大学法文学部紀要文学科編第十一号―一。なお、同僚の蘆田耕一助教授は本学附属図書館桑原文庫に次の一本があることを教示された。

該本は、縦25.7㎝×横18.5㎝の袋綴じで、改装表紙に「館良臣謄写／隠岐国産物絵図註書／桑原氏蔵書」と墨書され、元表紙には「隠岐国産物絵図註書　越智郡／周吉郡／海士郡／知夫里郡」と記されている。内容は、冒頭に『倭名類聚抄』隠岐国から抄出した罫紙一葉を置いて絵図註書が続いている。後半の「隠岐国産物」の記事は省かれている。罫紙に次の識語がある。

丙午初夏十八日謄写之簡齊之東窓下斯日喧晴舒

夏気唫懐悠揚学堂生徒来登今将就返講之業乎
　梆子之声既催出勤云館良臣漫題

「丙午」は明治三十九年で、「館良臣」は教職にあった人物かと思われるが、松江市内の学校に該当する名を見出していない。註書はA類の本文に近いが小異もある。原本が何であったのか興味が持たれる。

(2) 拙稿「『隠岐国海士郡海士村産物　扣江』について―解題と翻刻―」山陰地域研究（伝統文化）第六号

(3) 注1の拙稿、および注2の解題を参照のこと。

(4) 他藩の例であるが、鳥田智庵の著作とされる『長防産物名寄』の「周防産物名寄」もまた、その主要な記事を支藩である岩国藩から提出された『周防岩国吉川左京領内産物并方言』によっている。拙稿「『周防産物名寄』の成立」島大国文十九号。

(5) 拙稿「『周防産物名寄』の方言語彙」島根大学法文学部紀要文学科編第十四号―一

(6) 享和二年（1802）序、同三年初版。引用は杉本つとむ編著『小野蘭山本草綱目啓蒙　本文・研究・索引』（昭和四十九年、早稲田大学出版部）による。

(7) 徳川宗賢・佐藤亮一編、1989年、小学館

(8) 『享保元文諸国産物帳集成』第Ⅶ巻（昭和六十二年、科学書院）所収『隠岐国産物絵図』六三頁、および同書所収『出雲国産物名疏　隠岐郡』一五七頁参照。

(9) 広戸惇・矢富熊一郎編、昭和三十八年、島根県方言学会発行

(10) 『日本方言大辞典』は『四河入海』から引いているが、亀井孝氏が「漆桶万里が作の抄もののうちから」（「国語学」84集、『日本語のすがたとこころ(二)』亀井孝論文集4、昭和六十年、吉川弘文館、所収）で紹介された抄物『天下白』（文明九～十四年成）の次の例が早い例である。

　蜈蚣　日本ノナメクヂノ属也、ナメクシリトモ云也

(11) 国立国語研究所編『日本言語地図』（昭和四十七年、大蔵省印刷局）付載

(12) 島根県女子師範学校編（石田春昭担当）、昭和七年。後に国書刊行会から昭和五十年に再刊。

(13) 島根県女子師範学校郷土研究第三輯（石田春昭担当）、昭和十一年。

(14) 注8の書の六五頁、および一六二頁参照。

(15) 同右書六九頁、および一六三頁参照。

(16) 同右書七〇頁、および一六三頁参照。

(17) 昭和五十八年、読売新聞松江支局。

(18) 注8の『出雲国産物名疏』一二八頁参照。

(19) 同右書の二一頁、および一四〇頁参照。なおカラー口絵が二頁にある。

(20) 同右書三二頁、および一四五頁参照。

(21) 同右書二六頁、および一四二頁参照。これもカラー口絵が一頁にある。

(22) 注8の書所収、五〇一～五〇四頁参照。

(23) 同右書二八頁、および一四三頁参照。

(24) 拙稿「方言資料としての『出雲国産物名疏』」（『奥村三雄教授退官記念　国語学論叢』所収）で出雲地方における問題点を述べた際に、隠岐についても言及した。

(25) 注8の書の九九頁参照。